

和漢混淆文に於ける漢語「終焉」の出自に就いて

——「往生伝」を出自とする漢語の存在——

宇都宮 啓吾

目次

- 一、はじめに
- 二、「終焉」の読法
- 三、和漢混淆文に於ける「終焉」の意味・用法
- 四、中国文献に於ける検討
- 五、平安時代の和文に於ける検討
- 六、日本漢文に於ける検討
- 七、「終焉」の受容経路と意味変化
- 八、おわりに

一、はじめに

中世に於いて、漢語が増加し、一般用語として国語文の中に浸透したことは、従来の諸氏の御論考によって説かれて

きたところである。

漢語研究の一つの方向として、対象とする漢語の出自や移入経路、わが国に於ける語義や語形の変容を明らかにするということが存する。

峰岸明博士は、和漢混淆文に用いられた漢語を、中国文献に於ける仏典と漢籍、本邦に於ける「古記録」を主たる出自とする、⁽¹⁾〈仏典系漢語〉〈漢籍系漢語〉〈日常漢語〉の、少なくとも三類に区分する必要があることを説かれている。

又、最近では、新たに、「日本漢詩文」を出自とする漢語の存在が説かれるなど、⁽²⁾漢語の出自を説明しようとする試みが諸氏によって為されつつある。しかし、中世に見られる漢語は非常に多種多様であり、現在報告されている四つの出自だけでは漢語を出自の観点から分類することは非常に困難であろうと考えられる。その為、今後も、漢語の解明の手段として、個々の漢語に就いての出自の観点からの検討も為されねばならない。

そこで、本稿に於いては、和漢混淆文に於ける漢語「終焉」を対象として、その出自を求め、和漢混淆文への従来とは異なった受容の為され方に就いての提示を試みる。

二、「終焉」の読法

始めに、本邦に於ける漢語「終焉」の読法が如何なるものであったのかを検討する。

鎌倉時代以前の古辞書類に漢語「終焉」を収録するものは、管見では見出し難く、その為、平安鎌倉時代の文献に於いて、その読法の示された例を調査してみると、次に示したような例が見出される。

①御終焉席（東大寺図書館蔵『笠置上人御自筆願文』第四紙13行）

②終（平）焉（平）之暮（平） （最明寺本『往生要集』上 82丁オ）

③終（平）焉（平）金（平）懸（平）ヲ（平） （大東急記念文庫蔵『光明真言土沙勸信記』下 汎行）

和漢混淆文に於ける漢語「終焉」の出自に就いて

④終(平)焉(平)のゆふへに(終焉之暮…小野随心院藏『往生講式』古聖教一—10 73行)これら4例によって、漢語「終焉」の読法には「シウエン」「シユエン」の二種が求められる。そして、これら二種の相違は「終」字の読法によっている。

そこで、この「終」字に就いて、呉音資料と漢音資料との例を以下に挙げてみる。

○呉音資料(一)シユ

○命(平)終(去)濁(シユ) (專修寺藏『三帖和讀』浄 121・1)

○臨(去)終(上)濁(現(平)濁)前(去)濁(同 74・1)

○漢音資料(一)シウ

○終(平)懸(軍(平)整) (長承本『蒙求』10)

○終(平)霄(平) (前田本『色葉字類抄』上ヨ疊字118オ3)

○終・通撰 齒音 東韻 清 平声 第三等 (『韻鏡』)

呉音資料である專修寺藏『三帖和讀』の例によって、呉音が「シユ」であり、漢音資料である長承本『蒙求』や又、前田本『色葉字類抄』の例によって、漢音が「シウ」であることが知られる。

そこで、②③の例(「シウエン」)は、仮名自体「シウ」とあることから、漢音読されたことが知られる。それに対して、④の例(「シユエン」)は、仮名自体が「シユ」とあることから、呉音読されたと覚しい例となる。

このような点からすると、「終焉」の読法は、②③や④の文献に於いてそれぞれの音が異なるように、呉音乃至は漢音の孰れによっても読まれ得たようである。

三、和漢混淆文に於ける「終焉」の意味・用法

和漢混淆文に於いて、「終焉」という漢語が如何なる意味・用法を持つ語であるのかを知る為には、鎌倉時代以前に成立した和漢混淆文に現れる「終焉」の出現状況とその用例とを以下に示してみる。

〈表1〉

三教指帰注(中山法華経寺蔵本)	富家語	
三宝絵詞(観智院本)	宝物集	
往生要集(高野山西南院蔵本)	唐物語	
往生要集(興福寺蔵本)	方丈記	
今昔物語集	古事談	4
仏教説話集(金沢文庫本)	長谷寺観音記	
法華百座聞書抄	草案集	
古本説話集	自行三時礼功德義	
打聞集(京都国立博物館蔵本)	光言句義釈聴集記	
中外抄	海道記	
歎異抄	十訓抄	2
閑居友	古今著聞集	
保元物語	開目抄	
平治物語	末燈抄	
明恵上人夢之記	御消息(善性寺本)	
光明真言土沙勸信記	三帖和讃	1
却廢忘記	日蓮上人消息文抄	
高山寺明恵上人行状	新樂府注	2

和漢混淆文に於ける漢語「終焉」の出自に就いて

今物語	沙石集
宇治拾遺物語	平家物語(延慶本)
東関紀行	平家物語(寛一本)
撰集抄	源空上人伝
正法眼蔵	六波羅殿家訓
正法眼蔵隨聞記	

(排列は時代順であり、作品の下の数値が用例数である。又、数値の示されていない作品は、用例の存しないことを示す。)
 (表1)〜(表18) (表2)・(表5)を除く)に就いては、紙面の都合上、当該表が二頁に亘る場合も存する。この場合の見方は、第一頁上段↓第二頁上段
 ↓第一頁下段↓第二頁下段という順序である。)

○光明真言土沙勸信記

1 イハムヤ・コノヨノ・ハ一旬九一旬ノ・スカタ・^スロテニ重一病ヲウケ・イタツラニ・終^{シウ}平^{ヘン}一^{エン}焉^ニマタムトキ・
 ナサケアラム人・コノ土沙ノ・功能ヲ信シテ・(下21)

○高山寺明恵上人行状

2 文殊ヲ師トシテ大智恵ヲエムト祈請シ始シヨリ、ツイニ終焉ノ期ニ至マテ、(往生の夢の事…上56ウ)
 3 上人在生ノトキ、文殊大聖ニ大智ヲ乞ヒ、仏法ノ玄旨ヲ心ノ「底ニウカ、イテ澶ルトコロ、併ニ空ノ妙理ナリ、終焉
 ノ期ニ至テ殊ニ好ミ説クトコロ、偏ニ此事ナリシカハ、(下65オ)

○古事談(第三 僧行)

4 恵心僧都妹尼^{安養}終焉^ニ之^云之^云者。必可ニ来会^ニ之^云之^云由。僧都契約^{々々}。 (中略)安養尼其後経ニ六ヶ年。臨終正念所ニ往生^ニ也^{云々}。
 (61・12)

5 戒壇房阿闍梨教禪終焉^ニ之^云之^云。着^ニ法服^ニ入持^ニ仏堂^ニ。修^ニ両界供養法^ニ。終了。(64・1)

6 永観律師終焉^ニ之^云之^云者。苦痛ヤ御スルト奉^レ問ケレハ。寿尽^ニ之^云之^云歡喜^ニ如捨衆病ト云文ヲ被^レ示ケリ。(69・8)

7 蓮仁聖人坊本。参三会吉田斎宮御臨終。令レ唱二釈迦牟尼仏名毘盧遮那一。(中略)又小叱唱二念仏如レ眠令二氣絶給一。上人云。是コソ実ノ御終焉云。(78・13)

○十訓抄

8 有国ハ伴大納言後身也。伊豆国ニ彼大納言影ヲト、ム。有国カ容貌サラニタカハス。又善男終焉ノ時、「当世ニハ必今一度奉公ノ身タラン」ト云ケリ。(二59・1)

9 菅三位ノ終焉ノキサミ近キケルニ、善知識ノ聖人ヨヒニヤリタリケレハ、(中略)極楽ノ莊嚴心ニウカヒテ、忽ニ聖衆ノ来迎ニアツカリ給ヒケル。(十42・2)

○平家物語(延慶本)

10 一天四海ニ栄花ヲ開キ終焉ノ暮ニハ三尊ノ来迎ニ預テ九品蓮台ニ往生ス(一本22ウ3)

11 サレトモ終焉ノ時一念ノ菩提心ヲ発シニ依テ遂往生ノ素懐ヲタリトコソ往生伝ニハ見ヘテ候ヘ(五末52オ9)

○平家物語(寛一本)

12 されども終焉の時、一念の菩提心ををこししによ(ツ)て、往生の素懐をとげたりとこそうけ給はれ。(下282・2)

以上の如く、和漢混淆文に於いては、12例が見出される。

これら1から12までの用例の意味を検討すると、「終焉」乃至は10の「終焉のゆうへ」という形で、孰れも、「いまわ・臨終・最期」といった意味に落ちつくようである。

次に、この「終焉」が如何なる場面に現れるのかを考えてみる。

「終焉」という漢語が「いまわ・臨終・最期」といった意味だけに、ある人物の最期の場面で用いられている。しかし、それだけに留まらず、もつと詳細に見ると、次のようなことに気付かれる。

和漢混淆文に於ける漢語「終焉」の出自に就いて

即ち、同じ文章の中に、「往生」や「極楽」という仏教思想を示す語が現れる場合が多く、ある人物が極楽に往生する場面、乃至は往生思想を背景とする場面に於いて、この「終焉」という語が用いられる傾向にある。

それが〈表2〉に示した結果である。つまり、「終焉」の例、全12例中の9例までがそのような往生思想を背景とする「往生話」の中で使用されており、このことは、一つの傾向性として認められると考えられる。

〈表2〉

作品名	「往生話」中の用例	「往生話中」の用例でない
光明真言土沙勤信記		1
高山寺明恵上人行状	2	3
古事談	4 5 6 7	
十訓抄	9	8
延慶本平家物語	10 11	
覚一本平家物語	12	

そこで、漢語「終焉」の出目を求めるといふ点からすれば、意味の観点は勿論のこと、「往生話」との関わりという二点からの検討が必要となると考えられ、この点に注意を払って、検討を進めて行く。

四、中国文献に於ける検討

「終焉」という語が漢語であるため、先ず、中国文献に注目する。

そして、ここでは、仏典と漢籍という二つの文献群に於いての検討を試みる。

(1)、仏典に於ける検討

始めに、和漢混淆文に於ける「終焉」が、「往生話」という仏教思想との関わりが知られるため、先ず、仏典に於ける「終焉」の調査を行なつてみる。

対象とした文献は、『大正新脩大藏經』に収録されている漢訳仏典・『慧琳一切經音義』等の音義類である。(『大正新脩大藏經』に就いては、一漢語として認められる語に就いての検索が可能であることから、その索引を用いた。但し、この索引は一字索引ではないため、『妙法蓮華經』・『浄土三部經』・『不空羼索神呪心經』といった本邦に影響を与えたと考えられる若干の經典(訓点資料の形で本邦に於いて誦誦されたことが知られる經典をも含む)、又、中国撰述の「往生伝」や「高僧伝」の類に就いては、索引に頼らず、逐一、調査を行なつた。又、音義類に就いては、掲出字索引を用いている。)

その調査の結果、仏典に於いては、現在までの調査では、漢語「終焉」を見出し得ていない。

ただ、僅かに、字面のみ、即ち、「焉」字を助字として用いた例で、本邦に於いては訓読されるであろう例のみが僅かに見出せた。

例えば、次の例、

頃刻^に二人同終焉^ス(東大寺図書館蔵『新修浄土往生伝』裏12オ6)

がそれに該当する。

とは言え、このような例では漢語たり得ず、又、和漢混淆文に於ける「終焉」の意味とも異なっている為に、仏典が和漢混淆文に於ける「終焉」の出自とは考え難い。

(2)、漢籍に於ける検討

次に、漢籍に就いて検討を行なう。

調査文献としては、『大漢和辞典』・『佩文韻府』その他、引得類によつて検索し得る文献とし、その調査結果を用いて

和漢混淆文に於ける漢語「終焉」の出自に就いて

検討する。

その調査結果に就いては、以下の通りである。

○韻文△表3▽

詩經	1	温庭筠歌詩	
楚辭		杜牧詩	
毛詩		王維詩	
陸機詩		李白詩	
陶淵明詩文	1	白樂天詩後集	
玉臺新詠		孟浩然詩	
張籍歌詩		韓愈歌詩	
杜詩(九家集注杜詩)	5	孟郊詩	
陳子昂詩		漢詩大觀*	2
李賀詩			

○散文△表4▽

(「*」の付されたものは、実際の文献名ではない。便宜上、漢詩文を集成した書の名を示す。)

尚書		淮南子	
管子		史記	
春秋		戦国策	
孫子		説苑	
論語		白虎通	
周易		漢書	
国語		嵇康集	
列子	1	広雅	

墨子	曹植文章	1
老子	三国志及裴注	
春秋左氏伝	山海経	
孟子	世説新語	
荘子	後漢書	
荀子	文心雕龍	
儀礼	文選	1
爾雅	貞觀政要	
春秋公羊伝	南史	
周礼	佩文韻府	3
礼記		

○詩経

1 望_三楚与_二堂 景_三山与_二京 降_三觀于_二桑 卜云其吉 終_三焉允_二臧 (国風)

○陶淵明集

2 何以写_レ心。胎_三此_二話言。進_三簣雖_レ微。終_三焉為_レ山。(卷一 詩四言 贈_三長沙公)

○九家集注杜集

3 灌園曾取適遊寺可終_三焉。(卷三十五 双楓浦)

4 趙云謂之曾則往嘗如此矣自此而至彼以遊寺為終_三焉之計也 (同右)

5 高義終_三焉在斯文去矣休 (卷三十五 奉送王信州峯北婦)

6 孔子曰聞將軍高議論語天之未喪斯文史云有終_三焉之志 (同右)

7 古人称逝矣吾道卜終_三焉 (寄岳州賈司馬文丈巴州嚴八使君兩閣老詩)

和漢混淆文に於ける漢語「終焉」の出自に就いて

○白楽天詩後集

8 田氏將非_レ久。天与_二愛_一水人_一。終焉_レ落_二吾手_一。(卷一 泛春地)

○孟浩然詩集

9 天宮近兜率沙界豁迷明欲就終焉_レ志恭聞智者名。(卷二 陪張丞相祠紫蓋山途經玉泉詩)

○韓昌黎詩集 (漢詩大觀)

10 又牙_レ食_レ物。顛倒怯_レ瀨_レ水。終焉_レ捨_レ我落。(卷四 落_レ齒)

○杜少陵詩集 (漢詩大觀)

11 白日已偏照。可使_レ當_二吾居_一。終焉_レ託長嘯。毒瘴未_レ足_レ憂。(卷二十二 次_二空靈岸_一)

○國語

12 子犯知_二文公之安_レ齋、而有_二終焉_一之志也 (晉語 四)

○三國志及裴注

13 植登_二魚山、臨_二東阿、喟然有_二終焉_一之心。(魏志、陳思王植傳)

○文選

14 息心了義終焉_レ游集 (卷五十九 頭陀寺碑文)

○南史

15 游于匡山遇_レ処士張孝秀相得甚歡遂有_二終焉_一之志 (劉慧斐傳)

○佩文韻府

1 詩 卜云其吉——允臧

15 南史劉慧斐傳 游于匡山遇_レ処士張孝秀相得甚歡遂有_二——之志

そして、以上の結果から帰納される「終焉」の意味は、次の〈表5〉のように大きく三つに分類できる。

〈表5〉

意味	用例番号
余生を落ちついて送ること	3 4 5 6 9 12 13 15
窮まって通じないこと・困窮	7
とうとう・最後に	1 2 8 10 11 14

三つ目の意味「とうとう・最後に」の「終焉」は、本邦に於いては、〈参考3〉に示した図書寮本『文選』に見られる「終焉」の如く訓読され、漢語として見做されない場合も存したようである。

〈参考3〉終焉 (息心了義終焉游集・書陵部蔵『六臣注文選』)

以上のように、漢籍に於ける「終焉」の意味は「余生を落ちついて送ること」・「窮まって通じないこと・困窮」・「とうとう・最後に」といった三つの意味に大別でき、本邦の和漢混淆文に於ける「いまわ・臨終・最期」という意味が存しないために、漢籍が和漢混淆文に於ける「終焉」の直接の出自とは考え難い。

又、仮に、漢籍に和漢混淆文と同様の意味の「終焉」が存したとしても、その用例が漢籍に存するのでは仏教的色彩が乏しく、和漢混淆文に於ける「終焉」の仏教的性格である「往生話」との関わりという点の説明が出来ず、この点でも漢籍が和漢混淆文に於ける「終焉」の直接の出自とは認められないようである。

以上のように中国文献を検討した結果、「終焉」という語形自体は存するものの、意味が異なるために、本邦の和漢混

和漢混淆文に於ける漢語「終焉」の出自に就いて

清文に於ける「終焉」の直接の出自に、中国文献を定めることは出来ないと考えられる。

五、平安時代の和文に於ける検討

中国文献に、和漢混淆清文に於ける「終焉」の出自を求められない以上、本邦の文献に注目する必要がある。

そこで、まず、平安時代の和文を取り上げて検討する。その際、和文をへ表6へからへ表8へまでの三つに分類し、又、参考として同じ平仮名文資料の消息・書状の類をへ表9へに加え、それぞれ、以下に「終焉」の例が存するか否かを確かめることとした。

○歌集（表の形式は先掲のものと同様。）へ表6へ

<p>(万葉集) 古今和歌集 後撰和歌集 伊勢集 斎宮集 曾丹集 馬内侍集 四条宮下野集</p>	<p>拾遺和歌集 続拾遺和歌集 金葉和歌集 極楽願往生歌 詞歌和歌集 梁塵秘抄 千載和歌集 (山家集)</p>
--	---

○歌論（表の形式は先掲のものと同様。）へ表7へ

<p>歌経標式 倭歌作法 和歌式 和歌體十種</p>	<p>九品和歌 能因歌枕 隆源口伝 俊頼髓脳</p>
--	--

類聚証
新撰和歌髓腦
新撰髓腦

奥義抄
和歌童蒙抄
袋草子

○散文（日記・隨筆・物語）（表の形式は先掲のものと同様。）（表8）

竹取物語
伊勢物語
土左日記
平中物語
大和物語
多武峰物語
落窪物語
蜻蛉日記
宇津保物語
枕草子
和泉式部日記

紫式部日記
源氏物語
いほぬし
大鏡
栄花物語
夜の寝覚
堤中納言物語
更級日記
浜松中納言物語
狭衣物語

cf. 消息・書状（表の形式は先掲のものと同様。）（表9）

北山抄紙背仮名書状
藤原行経書状
大納言房讓状案
某書状（東南院文書）

諸仏菩薩積義紙背文書
三宝感應要録紙背文書
源頼朝書状
藤原俊成仮名書状

和漢混淆文に於ける漢語「終焉」の出自に就いて

追捕使山口清任書狀

奉恒書狀案

根来要書文書

虚空藏菩薩念誦次第紙背文書

仏頂抄紙背文書

不空三藏表制集紙背文書

灌頂阿闍梨宣旨官牒紙背文書

後白河法皇宸翰書狀

保延二年二月十日某書狀

佐伯佐長讓狀

菅原定隆書狀

保元三年六日某讓狀

文泉抄紙背文書

高階氏女菩提寺讓狀

梶原景時室書狀写

これらの調査によれば、平安時代の和文に於いては「終焉」の例を見出し得なかつた。

そこで、和漢混淆文に於ける「終焉」の出自として、和文は考え難いと言えそうである。

事実、和文に於いては、「終焉」とほぼ同義の「いまは」という語が（参考4）の如く、「終焉」の代わりに使用されている。

（参考4）○むまれし時より思ふ心ありし人にて故大納言いまはとなるまでたゞこの人の宮つかへのほいかならずとけ

させたまつれ（『源氏物語』桐壺14・3）

右の『源氏物語』の例のように、「いまは」の如き和語が和文に存する以上、和文に於いては敢えて漢語「終焉」を用いる必要は無かつたものと考えられる。

以上のことから、和漢混淆文に於ける「終焉」の出自を和文に定めることは出来ないと考えられる。

六、日本漢文に於ける検討

本邦の資料の内、和文に「終焉」の出自を求め得ない為、日本漢文と称される日本人の手に成る漢文を検討する必要が存する。

そこで、稿者が調査した文献を、その内容面から、〈表10〉から〈表18〉までの九類に分けて検討を行なうこととした。それが以下の結果である。

○史書類（表の形式は先掲のものと同様。）〈表10〉「1」の中の数字は用例番号）

古事記	日本後紀	1
風土記	続日本後紀「1」	
日本書紀	日本文徳天皇実録	
続日本紀	日本三代実録「2、3」	2

○古記録類（表の形式は先掲のものと同様。）〈表11〉「1」の中の数字は用例番号）

貞信公記	水左記	
九曆	帥記	
吏部王記	後二条師通記	
小右記「4、5」	長秋記	2
権記	殿曆	
御堂関白記	永昌記	
左経記	知信朝臣記	
春記	兵範記	

和漢混淆文に於ける漢語「終焉」の出自に就いて

○古文書・古往来類（表の形式は先掲のものと同様。）△表12▽〔 〕の中の数字は用例番号）

古京遺文* 続古京遺文* 寧楽遺文* 平安遺文* [6] 雲州往来 和泉往来	1	高山寺本古往来 垂髮往来 東山往来 菅丞相往来 釈氏往来
---	---	--

〔*〕の付されたものは、実際の文献名ではない。古文書の場合、一文獻が片々たるものである為、各文献の全てを挙げる訳にはいかず、便宜上、それらを集成した書の名を示す。

○法制書類（表の形式は先掲のものと同様。）△表13▽〔 〕の中の数字は用例番号）

延喜式 令義解	令集解
------------	-----

○注釈書類（表の形式は先掲のものと同様。）△表14▽〔 〕の中の数字は用例番号）

文鏡秘府論 作文大體 口遊	音楽根源抄 管弦音義
---------------------	---------------

○漢詩文類（表の形式は先掲のものと同様。）△表15▽〔 〕の中の数字は用例番号）

懷風藻 凌雲集 文華秀麗集	江吏部集 侍臣詩合 本朝文粹
---------------------	----------------------

経国集〔5〕 遍照發揮性靈集 都氏文集 田氏家集 菅家文章 菅家後集 雑言奉和 粟田左府尚齒会詩 天徳三年八月十六日鬪詩行事略記 善秀才宅詩合 資実長兼両卿百番歌合 扶桑集 本朝麗藻〔7〕	江都督納言願文集 朝野群載 本朝統文粹 高山寺表白 高山寺本表白〔8〕 本朝無題詩 法性寺入道殿御集 彰考館蔵願文集〔9〕 言泉集 笠置上人御自筆願文〔10〕 九条家本中右記部類紙背漢詩 勸修寺本中右記部類紙背漢詩
1	1 1 1

○文筆類 (表の形式は先掲のものと同様。) △表16▽ 「」の中の数字は用例番号

浦島子伝 富士山記 続浦島子伝 新猿楽記 玉造小町壮衰記 将門記	傀儡子記 遊女記 狐媚記 暮年記 陸奥話記
---	-----------------------------------

和漢混淆文に於ける漢語「終焉」の出自に就いて

○教義書類（表の形式は先掲のものと同様。）〔表17〕〔1〕の中の数字は用例番号

法華義疏	新訳華嚴經音義私記
因明論疏明灯抄	三教指帰
唯識論疏肝心記	往生要集〔11〕
	1

○縁起・伝記類（表の形式は先掲のものと同様。）〔表18〕〔1〕の中の数字は用例番号

元興寺伽藍縁起	大師御行状集記
唐大和上東征伝	伝教大師御行状記
空海僧都伝	日本往生極楽記
鑿真和上三異事	大日本国法華験記
日本靈異記	続本朝往生伝
叡山大師伝	拾遺往生伝〔13〕〔19〕
伝教大師行業記	後拾遺往生伝〔20〕〔25〕
興福寺縁起	三外往生記
上宮聖徳法王帝説	本朝新修往生伝〔26〕
慈覚大師伝	弘法大師御伝〔12〕
聖徳太子伝暦	高野山往生伝〔27〕〔30〕
贈大僧正空海和上伝記	探要法華験記
金剛峯寺建立修行縁起	当麻曼荼羅縁起
金剛峯寺契定第三伝法二会式日	諸山縁起
敬勸心奉造仏塔曼荼羅等事	粉河寺縁起
堅師記	
	4 1 1 6 7

(1)、『終焉』の意味の検討——共起語を手懸りとして——

150種以上の文献中に、「終焉」の例は30例を見出せた。

これら諸例の意味・用法を検討する場合、「終焉」と共起する語を手懸りに検討することが有効であろうと考えられる。そこで、まず、「終焉」とその共起語とを合わせた形で諸例を分類してみると、以下のアからカまでの六種になる。

①名詞

ア、「志」

一七年転_二大僧都_一。自有_二終焉_一之志_一。隱_二居紀伊国金剛峯寺_一。(『続日本後紀』承和二年三月庚午条)

アは、「志」と共起した「終焉」の例である。

ここに現れた例は、先の中国文献の検討に於いて示した例(参考5)と同様の形であり、中国に於ける意味「余生を落ちついて送ること」に近いと考えられる。

〈参考5〉子犯知_二文公之安_一斎、而有_二終焉_一之志_一也(晋語 四)

但し、本例に於いては、「隱居」という語が同じ文章中に存するように、寧ろ限定的に、「出家や遁世をして余生を送る志」と考える方がふさわしいようである。つまり、「終焉」自体の意味も、「出家や遁世をして余生を送ること」となると考えられる。このことは、時代は降るものの、〈参考6〉の文明本『節用集』に於いて、「終焉」の語義を「老いを送る義」としていることから確認できる。

〈参考6〉^{シユウエン}終焉^{送老} (文明本『節用集』91・4)

^{ラフワル}終焉^{義也}
^{ツイニ}イツクシ

イ、「地・処」(場所を示す語)

12 中和尚ト地南山。置一伽藍。為終焉之処。其名曰金剛峯寺。(弘法大師御伝)下55・8)

2 俄而入丹波国水尾山。定為終焉之地。自後不御酒酢塩鼓。隔二三日。一進齋飯。六時苦修。

(日本三代実録)元慶四年十二月四日条)

3 太上天皇巡覽山城大和摂津等国名山仏寺。宗叡奉引導。到丹波国水尾山。以為終焉之地。

(日本三代実録)元慶八年三月廿六日条)

7 深草西岸有二旧墟。臨河有楊柳兩三株。人伝天慶征東使終焉之地也。(本朝麗藻)卷下212上18)

5 会成教上人、如八仙居建立、寺号慈心寺、其寺辺亦構草菴、為終焉処、常住念仏云々、

(小右記)長元二年九月八日条)

15 私云。一条堀川。是彼終焉之地也。堂舍于今存。余親見之。(拾遺往生伝)中607下14)

24 元慶元年遁世。為太上法皇。遷御水尾寺。营造仏堂。以定終焉之地。(後拾遺往生伝)下663上5)

イは、「地・処」という地点を示す語と共起している「終焉」の例である。

例えば、用例2や用例24から知られるように、「出家や遁世をして余生を送る処」として理解でき、それ故に、「終焉」自体の意味も、アと同様に「出家や遁世をして余生を送ること」と理解できる。

ウ、「暮」

11 何不願終焉之暮即託蓮胎而期留悠生。死至龍花会耶(最明寺本『往生要集』卷上82才2)

28 只懸思於水上之蓮。禅觀久積。遙通望於雲西之月。終焉之暮。念仏逝去。(高野山往生伝)70下14)

ウは、「終焉之暮」という例である。この例によって、「終焉」という語が時間的な幅を持った意味を有していることが確認でき、「終焉」の意味が「死ぬ」といった瞬間に着目した意味では無いことが確認できる。

さて、「終焉之暮」自体の意味を考えてみる。

用例11・用例28共に、「終焉之暮」という句全体で「臨終・いまわ・最期」という意味を有しており、比喩的な表現と考えられる。つまり、「暮」という語が単なる「夕暮れ」を意味するのではなく、「時間的な末、乃至はある時間的幅の終わりの部分」を意味していると考えられる。そこで、時間的幅を有する「終焉」の「末」という句全体が慣用句的に「臨終・いまわ・最期」という意味になる以上、「終焉」自体は「余生」という意味になると考えられる。

エ、「時・刻・期・日・間・席・今生」

13 忽企離山之思。衆人雖相留。強以出山。但至于終焉之時。必成婦之約。〔拾遺往生伝〕上596上19)

14 其終焉之時。威儀如例。举音誦妙法。屈指結定印。如入禪定。向西終。〔拾遺往生伝〕上599下3)

16 至于如彼齡盈八旬。觀期八年。能知壽命之限。正待終焉之時也。〔拾遺往生伝〕下614下8)

18 吾是喜見菩薩之後身。來生此処。燒身三遍。今生之終焉。期三月十五日。〔拾遺往生伝〕下618下14)

19 裸聖命終不快。吾終焉之時。可葬彼聖之墓側。〔拾遺往生伝〕下619上8)

21 遺言而滅。寔知告終焉之日。可謂希夷。于時天治元年七月三日。春秋七十八。〔後拾遺往生伝〕中658上4)

23 然而偏願西方。無有他望。其終焉之間。所行之儀。安住正念。奄而入滅矣。〔後拾遺往生伝〕中662上17)

26 保延五年六月三日。身有病患。不能起居。語左右云。來八月終焉之期也。〔本朝新修往生伝〕687下19)

9 万歳終焉之刻速遂仏道証果望必住正念之不乱。〔彰考館藏願文集〕59ウ1)

6 寢食背例之時。告素意於本山。而間終焉之期。病痾悉止息。寂滅之剋、三業殊分明、手結法印、口誦真言、於本尊

前端坐遷化、(『紀伊国大伝法院陳状案』2157下3)

27 恐当山内有往生人歟。即尋其時日。已当小房終焉期。(『高野山往生伝』698下14)

30 屢踊躍于山殿之雲。其後終焉時到。向弥陀像。備香華。唱名号。安坐而即世。(『高野山往生伝』703上9)

10 御終焉エン席寧ネコロ仰ネ而シ言フ (『笠置上人御自筆願文』4—13)

エは、「時・期」といった、或る一定の時点を示す語と共に起する「終焉」の例である。

例えば、用例14や用例30の例に於いては、同一文脈内に「終(わる)・」「即世」といった「死」を意味する語が現れ、全体で「臨終の時・最期の時」という意味を担っていると考えられる。

又、用例16に於いても、自らの寿命を知り、「待終焉之時」という事から、「終焉之時」が「臨終の時・最期の時」となることは、自然と理解できる。

このような例から、「終焉」自体の意味も、「臨終・いまわ・最期」という意味になると考えられ、また、全例をそのように理解しても矛盾を来さない。

そして、このような例は、次の才も同様と考えられる。

才、「事・儀・儀容」(事柄)

17 次念黄不動尊。自生年十三。只啓終焉事。(『拾遺往生伝』下618上9)

20 雲林院内建一堂。模其来迎之像。方諳終焉之儀。弥戴頂法花。専欣極楽。(『後拾遺往生伝』上646下18)

29 熟思生前之行業終焉之儀容。定為得脱之人。(『高野山往生伝』703上2)

4 廿六日、乙亥、先一品宮薨〔資子内親王〕、春秋六十一、色上光相〔區〕、先朝〔先朝キ〕、日來炊時行〔頓キ傍〕、親王別当大納言齊信長〔齋〕、今暁參面山〔南キシ〕、〔女〕

「別当齊信卿今曉參南山、無沙汰人事」
親王家事無執行之人、終焉之事委付齊信卿、而忘却其事、如不聞建行、上下誹謗耳、

〔小右記〕長和四年四月廿六日条

オの例は、「事・儀・儀容」という語と共起する「終焉」の例である。

例えば、用例17では、往生者が若いうちから臨終時のことを話していたという内容と理解でき、又、用例4では、先の一品宮が亡くなり、その臨終時には別当の齊信が臨終の行事を執り行なうこととなつていながら、彼は金峯山に詣でた為はその任を忘れ、人々から非難されたという記事である。

それ故に、ここでも、「終焉」が「臨終・最期」といった意味であることが知られ、その他の例も、このように理解して矛盾を来さない例ばかりである。

②動詞

カ、サ行変格活用動詞

22 其明年果以遷化。其平生之時願曰。今年終身之期也。詣聖徳太子之廟廷可終焉者。〔後拾遺往生伝〕中658上12）
25 其翌日。嘯僧徒。講經念仏。繫五色糸於仏手。引之安住正念。唱宝号終焉也。〔後拾遺往生伝〕下667上2）

8 撰以斯、人類之有情、豈不報謝、爰暮三月今日、大師入定終焉也、〔高山寺本表白集〕東寺御影表白22）

最後のカの例は、アからオの例とは異なり、サ変動詞「終焉ス」と成る例で、その意味は「死ぬ」と考えられる。サ変動詞であろうことは、22の例で「可終焉」を「終焉スベシ」と訓読することから知られる。

又、「死ぬ」の意味であることは、8の例で「終焉」が「入定」と共起していることから確認できる。

和漢混淆文に於ける漢語「終焉」の出自に就いて

以上のことを纏めると、「終焉」の意味には、以下の如き四種の存することが知られる。

※「終焉」の意味

I ア・イに代表される

○「出家・遁世をして余生を送ること」

II ウに代表され、IとIIIとの両方に通ずる点を有する

○「余生」

III エ・オに代表される

○「いまわ・臨終・最期」

IV カに代表される

○「死ぬ」

(2)、意味毎の時代排列

次に、日本漢文に於ける「終焉」の用例を時代別に排列し、先の四つの意味で分類を試みる。その結果を、以下の表19に示した。

△表19▽

作品名(類)	I	II	III	IV
弘法大師御伝(縁起・伝記類)	12			

まわ・臨終・最期」という意味が起り、又、「死ぬ」という新たな意味が起るなど、当初には一つの意味であった「終焉」が、後には複数の意味を持つに至っている。

このような結果から考えると、和漢混淆文に於ける「いまわ・臨終・最期」の意味で使用される「終焉」の出自としては、初出例の点・使用数の点、又、既に述べた使用場面の点、つまり和漢混淆文に於ける「終焉」に「往生話」との関わりの存する点から、「往生伝」が相応しいということになる。

このような「往生伝」の影響を具体的に示す例としては、次の延慶本『平家物語』の例が参考となる。

伊与入道ハ伴ヒトス因貞任宗任セムヲ攻落サントテ十二年カ間ニ人ノ頸カビヲ斬事一万五千人山野ノ獸江河ノ鱗其命ヲ絶事幾千
万ト云事ヲ不知サレトモ終焉ノ時一念ノ菩提心ヲ発シニ依テ遂往生ノ素懐ヲタリトコソ往生伝ニハ見ヘテ候ヘ

(延慶本『平家物語』五末52才9)

この文章に於いては、「往生伝」を出典とする旨を明記しており、そのような文章中に「終焉」が現れている。

そして、この文章は、従来より、『統本朝往生伝』第三十六話が先行類話(「往生伝」)であると言われている。⁽⁶⁾そこで、その文章との比較を行なってみると、以下に示す文章の中には、「終焉」という語が存しないのである。

前伊予守源頼義朝臣者。出累葉武勇之家。一生以殺生為業。況当征夷之任。十余年来唯事鬪戰。臯人首斷物命。雖楚竹之竹。不可計尽。預不次之勳賞。叙正四位。伊予守。其後建堂造仏。深悔罪障。多年念仏。遂以出家。瞑目之後。多有往生極樂之夢。定知。十惡五逆猶被許迎接。何況其余乎。見此一兩。太懸特。

つまり、延慶本『平家物語』に存する例は、作者が独自に付加した語である可能性が考えられる。そして、一歩進めれば、そのような「終焉」の付加の背景には、延慶本『平家物語』の話が「往生話」であり、特に「往生伝」を出典とする話であった為に、それに相応しい語として「終焉」を付加したものと考えられる。とすれば、この事実は、何よりも「往生伝」が和漢混淆文に於ける漢語「終焉」の出自たることを示すと考えられる。

但し、ここで忘れてはならないことは、右が『統本朝往生伝』第三十六話と延慶本『平家物語』中の文章との比較による考察であり、この点に就いては尚一層の検討が必要であると考える。

とは言え、以上のような検討によつて、和漢混淆文に於ける「終焉」(いまわ・臨終・最期)の出自としては、初出例の点・使用数の点、又、既に述べた使用場面の点(和漢混淆文に於ける「終焉」が「往生話」に現れる傾向の存する点)や先の具体的事象から、「往生伝」を考慮することが出来る。

七、「終焉」の受容経路と意味変化

以上のような検討によつて、漢語「終焉」の受容経路と意味変化の様相が知られた。それを纏めてみると、次のようなことになる。

中国古典、とりわけ、漢籍の類に於ける「余生を落ちついて送ること。」という意味で用いられた漢語「終焉」が、本邦に於いては、初め、史書類に於ける伝記の部分に於いて「出家や遁世をして余生を送ること。」という意味で用いられた。つまり、本来は漢籍系の漢語であった「終焉」が本邦の和漢混淆文に於ける仏教語的な使用へと変わるその橋渡しには、伝記(『弘法大師御伝』や史書類の僧伝)の文章が介在しているのである。⁽⁷⁾そして、そのような伝記(僧伝)が介在することによつて、後の『往生要集』に於いては、「終焉之暮」という句全体で「余生の終わり」いまわ・最期・臨終」を意味するようになり、院政期の「往生伝」である『拾遺往生伝』以降では、「終焉」それ自体が「いまわ・最期・臨終」を意味するようになる。⁽⁸⁾又、その頃には、サ行変格活用動詞として、「死ぬ」という意味をも担うようになる。

このような意味変化は、孰れも、平安時代から院政期にかけて、日本漢文の世界に於いて起こったものであり、中世に於ける新たな文体ともいふべき所謂「和漢混淆文」の世界に於いては、日本漢文の中でも、とりわけ、「往生伝」という和漢混淆文に於ける意味「いまわ・最期・臨終」をその出自として受容し、「往生話」を中心にその使用を行なったこと

が窺われる。

八、おわりに

以上のように、和漢混淆文に於ける漢語「終焉」の出自としては、「往生伝」を考えることが出来た。

峰岸明博士は、〈参考7〉に引用したように、和漢混淆文に於ける漢語に就いて、少なくとも、〈仏典系漢語〉・〈漢籍系漢語〉・〈日常漢語〉という三類に区別すべきであることを説いておられるが、今回の検討によつて、「往生伝」を出自とする漢語の存在が窺われた為、〈日常漢語〉の内実に、古記録以外の文献の存すること、乃至は、三類以外に新たな類を設ける可能性の存することが考えられる。

〈参考7〉峰岸明「和漢混淆文の語彙」(『日本の説話7 言葉と表現』昭49・11)

これはなお、試案の域を出でないが、和漢混淆文に用いられた漢語についてその文体との関わりを観察する場合に、少なくとも二類、更には三類の区別を設定すべきではないかと考えている。その二類というのは、その出自が仏典、漢籍いずれに求められるかという区別に基づくものであつて、今仮にこれを〈仏典系漢語〉〈漢籍系漢語〉と称することができようか。更に三類というのは、これらに〈日常漢語〉という一類を加えたものである。ここに日常漢語と言うのは、仏典・漢籍に源流はあるが、本邦に入つて日常語となつたもの、又仏典・漢籍に典拠を求めることができず、本邦において新たに造られたと見られるもの、これらのことである。しかし、その日常漢語の中核を占めるものとして記録語出自の漢語を想定している。

このような点に於いて、本稿は、和漢混淆文に於ける「往生伝」(広くは伝記類和化漢文)の漢語受容の一問題として位置づけられる。

と同時に、「往生伝」や伝記類和化漢文は従来和化漢文研究に於いて等閑視されてきた資料であり、そのような文献

群が漢語受容史の一つの流れに影響を及ぼしていたのであり、それ故に、「往生伝」や、広くは伝記類和化漢文の資料的価値の一面を明らかにするものとして本稿を提示したい。

注

- (1) … 峰岸明「和漢混淆文の語彙」(『日本の説話7 言葉と表現』所収 東京美術 昭49・11)
- (2) … 山本真吾「平家物語に於ける漢語の受容に関する一考察——「上皇御所」の呼称をめぐって——」(『国語学』157 平元・6) 他、一連の研究
- (3) … 「終」字の声調が平声と、漢音の声調に一致する点が存疑。声調に従って、漢音とするならば、「終焉」の例は孰れも漢音読されたことになる。
- (4) … 和漢混淆文資料の選択は、注(1)論文を参考にした。
- (5) … 字面としては次のような例が存する。
今欲_レ法_ニ之_ヲ釈教_ニ。彼始_ニ自_レ空_ニ。尋_ニ之_ヲ儒風_ニ。其終_ニ焉_ニ在_ニ。
但し、この例は、対句表現の結果その字面が現れたのであり、漢語ではなく、訓読されたと覚しい例である。
- (6) … 『平家物語』の諸注釈書による。
- (7) … 「伝記」が漢籍系の文章と仏典系の文章との橋渡しの役割を果たした背景には、「伝記」の文章が漢籍に於いても仏典に於いても現れ、それ故に、これら二つの文章の中間的な文章性格を有しているためと考えられる。「伝記」がそのような中間的な性格を有していることは、訓点資料の世界に於いて、仏典系の訓法と漢籍系の訓法との両方の現れること(小林芳規『平安鎌倉時代の漢籍訓読の国語史的研究』 東京大学出版会 昭42・3)からも窺われる。
- (8) … このように、「●●之○」という形式で一つの意味を担っていたものが、「●●」だけで同様の意味を担う意味変化は、漢語の世界に於いて多々見出され、漢語史の一類型と考えられる。(cf. 「下若之酒」↓「下若」・「会稽之恥」↓「会稽」他)(小林芳規「広島大学国語史研究会会報」巻頭言に於いてこのような意味変化に就いての指摘が既に有る。)
- (9) … 注(1)論文

〈調査文献〉

調査文献に就いては、索引の存するものに就いてはこれを用いた。又、索引の存しないものに就いては、適宜、天理善本叢書・大日本古記録・史料大成・国史大系・新校群書類従・その他の影印本乃至は活字本を用いた。尚、用例を掲げた本邦文献に就いては以下に示す。

- ・東大寺図書館蔵『笠置上人御自筆願文』（稿者の原本調査による）
- ・最明寺本『往生要集』（最明寺本往生要集 影印篇） 築島裕他篇 昭63・6 汲古書院
- ・大東急記念文庫蔵『光明真言土沙勸信記』（明恵上人光明真言土沙勸信記 付如來講式）川瀬一馬監修 勉誠社 昭60・7）
- ・随心院蔵『往生講式』（花野憲道「随心院蔵仮名書き往生講式解説並びに影印・翻刻」『鎌倉時代語研究』第十三輯 平2・10）
- ・専修寺本『三帖和讃』（親鸞聖人真蹟集成 第三卷）法蔵館 昭49・1）
- ・長承本『蒙求』（長承本蒙求）築島裕編 汲古書院 平2・3）
- ・前田本『色葉字類抄』（色葉字類抄研究並びに索引本文編）中田祝夫・峰岸明編 風間書院 昭39・6）
- ・文明本『節用集』（文明本節用集研究並びに索引）中田祝夫編 勉誠社 昭54・11）
- ・『古事談』（『宇治拾遺物語・古事談・十訓抄』新訂国史大系18 昭7・10）増補国史大系 昭46・3）
- ・『高山寺明恵上人行状』（『明恵上人資料第一』東京大学出版会 昭46・3）
- ・『十訓抄』（『十訓抄本文と索引』泉基博編 笠間書院 昭57・12）
- ・延慶本『平家物語』（『重要文化財延慶本平家物語』汲古書院 昭57・10）
- ・覚一本『平家物語』（『平家物語』上・下 高木市之助他編 岩波書店 昭34・2、昭35・11）
- ・『源氏物語』（『源氏物語大成』池田龜鑑編 中央公論社 昭28・11）
- ・『続日本後紀』（『日本後紀・続日本後紀・文徳天皇実録』新訂国史大系3 昭9・11）増補国史大系
- ・『日本三代実録』（『日本三代実録』新訂国史大系4 昭9・7）増補国史大系
- ・『紀伊国大伝法院陳状案』（『平安遺文（古文書編）』臨川書店）
- ・『弘法大師御伝』（『新群書類従』6 川俣馨一編 内外書籍株式会社 昭6・10）
- ・『拾遺往生伝』（『往生伝 法華験記』井上光貞・大曾根章介編 岩波書店 昭49・9・原本による確認済み）
- ・『後拾遺往生伝』（『往生伝 法華験記』井上光貞・大曾根章介編 岩波書店 昭49・9・原本による確認済み）

- ・『高野山往生伝』〔往生伝 法華験記〕 井上光貞・大曾根章介編 岩波書店 昭49・9.. 原本による確認済み)
- ・『本朝新修往生伝』〔往生伝 法華験記〕 井上光貞・大曾根章介編 岩波書店 昭49・9.. 原本による確認済み)
- ・『小右記』〔小右記〕 大日本古記録 岩波書店 昭34・3〔昭57・3〕
- ・『高山寺本表白』〔高山寺本古往来 表白集〕 高山寺典籍文書綜合調査団 東京大学出版会 昭47・3)
- ・『本朝麗藻』〔新校群書類徒〕 6 川俣馨一編 内外書籍株式会社 昭6・10)
- ・『彰考館藏願文集』(山本真吾氏の書写本による)
- ・『続本朝往生伝』〔往生伝 法華験記〕 井上光貞・大曾根章介編 岩波書店 昭49・9.. 原本による確認済み)

(付記)

本稿は、国語学会中国四国支部第三十六回大会(平成三年十一月九日 於鳥取大学)に於いて口頭発表したものをもとに纏めたものである。席上、関一雄氏・山本真吾氏・西村浩子氏より貴重な御教示を賜わり、その折の研究懇談会では大友信一博士より、又、懇親会では曾田文雄氏より貴重な御教示を賜わった。記して深謝申し上げる。

又、小林芳規先生には終始変わらぬ御教導を賜わった。ここに銘記し、厚く御礼申し上げます。